

花はなをお惜しむ

福ふく沢ざわ諭ゆ吉きち

半はん生せいのこ行こう路ろ苦く辛しんのみ身み

幾いく度た春はるをむか迎むかえま還ま春はるをおく送おく

節せつ物ぶつはそ忽そ忽そとと留とどめめもも止やままず

花はなをお惜しむは人ひとはこ足たれれ霜しもをいた戴だくの人ひと

【作者】福澤諭吉(一八三四〜一九〇一年)(天保五年〜明治三十四年)、日本の武士。明治時代新思想の先覚者。大分中津藩の下級武士の子として大阪で生まれる。緒方洪庵の塾で蘭学を学ぶ。のち幕府の使節として三度洋行。明治元年慶應義塾を創立。以後教育と著作活動に専念。啓蒙思想家として功績を残した。「西洋事情」「学問のすゝめ」「文明論の概略」等は代表作。「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」は有名な言葉である。明治三十四年二月没す。年六十八歳。

【語釈】*節 物：四季おりおりの景色 ここで春の花の咲く季節のこと。 *忽 忽：日時のあわただしく過ぎゆくこと。
*霜 戴人：髪に白毛の混じっている老人のこと

【通釈】今まで歩んで来た後(あと)を振り返って見れば苦辛の連続であった。その間何回春がめぐって来たことだろうか。四季おりおりの景色の移り変わりは早くひきとめる事も出来ない。ようやく花を賞(め)で楽しむ事の出来る身になったが、すでに白髪の老人になってしまった。